2026.10.18.

「唯一の慰めに生きるために」

九州連合長老会宗教改革記念交換講壇(鹿児島教会)

新約　ローマの信徒への手紙７章 14 ～８章２節

１．はじめに

今朝は宗教改革記念講壇交換ということで、九州連合長老会から遣わされてまいりました宮崎中部教会の牧師、小堀康彦と申します。尾崎先生とは 10 歳違いますので東京神学大学で重なったことはありません。しかし、長老教会の伝統を重んじ、これを目指す牧師たちの学びの場などで、何十年も前からよくお会いしておりました。また、尾崎先生は前任地が尾張一宮教会で、私は富山鹿島町教会でしたので、どちらも中部教区の教会ということで教区の集会でも良くお会いしました。

南九州の改革・長老教会の伝道は、長崎のヘンリー・スタウト宣教師によって鹿児島教会の伝道が開始され、それから都城教会へと伝道が進展しました。その鹿児島教会と都城教会によって宮崎での伝道が為され、それによって生まれたのが宮崎中部教会です。鹿児島教会は創立 148 年になるようですが、宮崎中部教会は創立 102 年となます。今、宮崎中部教会は「100 年史」を作成しているところです。

九州連合長老会は毎年交換講壇を行っていますが、昨年からハイデルベルク信仰問答を用いてみ言葉の解き明かしをすることになりました。私どもの教会が伝統的に重んじてきた同じ信仰告白を用いてみ言葉に聞く。昨年は問１をめぐって為されました。

「問１　生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答　わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。……」

を巡って、み言葉を受けました。この問 1 は大変有名ですので、皆さんの中にも覚えておられる方も多いのではないかと思います。そして今年は、先ほどお読みいたしました、その次の問２

「問２　この慰めの中で喜びに満ちて生きまた死ぬために、あなたはどれだけのことを知る必要がありますか。

答　三つのことです。

第一に、どれほどわたしの罪と悲惨が大きいか、

第二に、どうすればあらゆる罪と悲惨から救われるか、

第三に、どのようにこの救いに対して神に感謝すべきか、ということです。」

を巡ってなされることになっています。聖書箇所は各牧師が選ぶことになっています。

このように申しますと、ハイデルベルク信仰問答は問 129 までありますので、全部終わるのに 130 年もかかってしまうではないかと思われる方もいるかもしれません。毎年、一問ずつやるとは決めておりませんので、多分そのようにはならないでしょう。

２．ハイデルベルク信仰問答の全体構造

では、どうして昨年は問 1、今年は問 2 という具合に進めているのか。この理由ははっきりしています。問 1 は、実に私どもキリスト者が生きていく上での無くてはならない慰め、私どもの地上の命を超えて支え続けてくれる「真の慰めは何なのか」と問い、「わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。」と答えました。私共の命、私共の存在そのものが、イエス・キリストのものである。私共の人生が私共自身のものではなく、主イエス・キリストのものである。ここに真の慰めがあることを告げました。まさに、「体も魂も、生きるにも死ぬにも」です。私共は過ぎ去りますけれど、父・子・聖霊なる神様は永遠から永遠まで生きておられ。そのお方の御手の中にあることは、何にも増して確かなことであり、決して過ぎ去ってしまうかりそめのものではないからです。この「ただ一つの慰めが与えられている」、ここにこそ私共の慰め、平安の源があるからです。この問の 1 に、ハイデルベルク信仰問答が書かれた意味がありましたし、この信仰告白が長く私共の教会の伝統の中で重んじられてきた理由です。

そして、問 2 において「問２　この慰めの中で喜びに満ちて生きまた死ぬために、あなたはどれだけのことを知る必要がありますか。」と問い、三つのことが必要であると告げます。「第一に、どれほどわたしの罪と悲惨が大きいか、第二に、どうすればあらゆる罪と悲惨から救われるか、第三に、どのようにこの救いに対して神に感謝すべきか」であると告げます。実は、この三つは、ハイデルベルク信仰問答の全体構造を指し示しています。ハイデルベルク信仰問答はこのように一冊の冊子になっています。日本基督教団信仰告白のような簡易信条ではありません。この信仰問答は三部構成になっています。問の 1 と 2 は「序」です。そして、第一部が「人間のみじめさについて」となっています。第二部が「人間の救いについて」となっていて、内容は使徒信条の講解と聖礼典(洗礼と聖餐)について告げられています。そして第三部においては「感謝について」とあり、十戒と主の祈りについて述べられています。ですから、この三つについて知ることは、私共の罪、使徒信条と聖礼典、十戒と主の祈りについて知るということを意味しているわけです。そうすれば、私共は父・子・聖霊なる神様が与えてくださった「健やかな命」に生きられる、「唯一の慰めの中に生きられる」と告げているわけです。順に見てまいりましょう。

３． 罪を知る　①神のみ前で

まず、大切なことは「自分の罪を知る」ということです。これは簡単そうに見えて、中々そうもいきません。自分が罪人であるということを認めるということは、他人と比べて自分はどうだというところでは決して起きないからです。使徒パウロはローマの信徒への手紙 7 章 18 節以下でこう告げました。「7:18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。 7:19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。7:20　もし、わたしが望まないことをして

いるとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。」自分は善を行おうとする意志はあるのですが、それを行うことが出来ない。自分では望んでいない悪を行っている。そこに「自分の罪」がはっきり現れていると言うのです。

私共は罪と言えば、法律を破っていることを考えるかもしれません。しかし、聖書が告げている罪とは、そのようなものではありません。何か法律を犯しているというようなことであるならば、「私は罪を犯していない」言える人もいるでしょう。しかし、絶対的に聖であられる神様の御前に出るならば、私共は自らの罪を全て暴かれてしまいます。神様は全てお見通しだからです。具体的に言えばすぐにわかることです。例えば、「私共は自分の利益ばかりを考える」という現実。私共は自分の知っている人や家族のことまでは考えるかもしれませんが、見も知らずの人のことなど少しは可哀そうにとは思うでしょうけれど、それ以上のことはしない。特に心も動かないし、その人のために自分の時間を割き、能力を捧げ、富を捧げることなどしない。そんことをしたら、わが身が持たないと思っているからです。確かに「身が持たない」のです。しかし、イエス様はどうだったでしょうか？わが身が持つようにされたでしょうか？そうされたなら、十字架はありませんでしたし、私共の救いもありません。このイエス様の前では、私共の愛の無さが明白にされてしまいます。

或いは、私共は他人を見て「あの人はひどいことをしている、罪を犯している」とは思いますが、同じ物差しで自分を判断することはしません。たいてい、自分は善人だは言わないが、それでも自分は中々良い人間だと思う。他人と比べる時、私共は必ず自分よりも悪いことをしている人を思い、あの人よりは自分はましだと思う。私は前任地の富山にいた時に教戒師をしていました。毎月、刑務所に行ってキリスト教の話を聞きたいという人に聖書の話をしてきました。その最初の時に必ず「あなたは罪人ですか」と聞きます。刑務所にはいてっているのですから、「自分は罪を犯していない」と言う人はいません。「私は罪人です」と言います。これは塀の中でしか聞けない言葉です。塀の外では、人は「私は罪人です」とは中々言いません。しかし、更に「言い訳が出来ないほどに、あなたは徹底的に罪人ですか」と聞きますと、「あの事をやってしまったことは悪いけれど、それ以外のところでは、自分は中々良い人間なのだ」と言います。私の経験ではほとんど例外はありません。私が相手にしていたのは、前科７犯、８犯というような人たちです。窃盗や薬物で捕まっている人たちがほとんどでした。彼らの本音は「自分はそれ程悪い奴ではない」というものでした。だから、何度も同じ罪を犯すわけです。自分が徹底的に罪人である。言い逃れの余地は無い。そのことを認めることが出来るのは、他人と自分比べることによってではなく、聖なる神様のみ前に立った時、神様の光に照らされたときにしか起きないのです。パウロは、ここで他の人と自分を比べたりしません。そうではなくて、神様の御光に照らし出されたとき、善をしたいと思いつつもそれが出来ない自分がいることを認めざる得なかったのです。神様のみ前に立つことを知らされたからです。

４．罪を知る　②救われているから

では、どうしてパウロは他人と比べるのではなく、そして言いて逃れることなく自らの罪を認めることが出来たのでしょうか。それは、今見てきましたように、第一には彼は神様のみ前に立つことを知っていたからです。しかし、それだけではありません。第二に、彼は自分が神様に愛され、罪赦された者であることを知っていたからです。8 章 1 節以下でパウロは「 8:1　従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。 8:2　キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」と告げている通りです。

思い起こしてみましょう。パウロはダマスコ途上において、復活のイエス様に出会い、回心しました。パウロにとって、イエス様を信じる人たちを捕えに行くという神様の御心に完全に反したことを「正しいこと」と信じていたわけです。その彼がイエス様に出会います。そして、イエス様こそ神の御子、キリストであることを知らされました。そして、自らの罪を言い訳が出来ないほどに徹底的に思い知らされたわけです。しかし、そこで何が起きたかと言いますと、パウロ自身が赦された、救われた、神の子とされる、伝道者とされるという出来事が起きたわけです。パウロにとって、自分の罪を徹底的に知るということと、それを赦され救われるということは、復活のイエス様に出会うという一つの出来事の中で起きたことでした。私共は自らの罪を知らされてから悔い改め、そして救われるという順番を考えがちです。しかし、自らの罪を知るということは、イエス様に出会って、「イエス様を信じるて悔い改める」ということと「イエス様に赦される」ということとは、コインの裏と表の関係です。イエス様に愛され、赦されるということなしに、神様のみ前に出て自らの罪を悔い改めるということは起きません。自分が赦され救われたから、私共は何の躊躇もなく自らの罪を認め、悔い改めることが出来るのです。もし、自分は神様に赦されないかもしれないとすれば、私共は何とかして言い訳を考え、言い逃れしようとするでしょう。そうしなければ、自分は自らの罪を裁かれ、滅んでしまうしかないからです。そんな恐ろしいことは出来ません。禁じられていた木の実を食べたアダムとイブがそうでした。

自らの罪を認めるということは辛いことです。心が痛むことです。しかし、それ以上に「喜びに満ちた」ことです。何故なら、「自らの罪を知る」ということと「わたしは救われたということを知る」ことは、決して切り離すことが出来ないことだからです。使徒パウロは、ローマの信徒への手紙 7 章で、罪の悲惨を告げます。24 節で「 7:24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」と嘆きます。絶望の嘆きです。ところが 8 章 1 節において「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。」と喜びの叫びを挙げています。救いの喜び、歓喜の叫びです。

５．救いの道を知る：使徒信条に言い表された信仰に生きる

イエス様の十字架によって、私の罪は赦された。そのことを知るがゆえに、私共は自らの罪を言い訳することなしに認め、神様に赦しを求めるわけです。

先ほど私が富山刑務所で教戒師をした時のことを話しました。それには続きがあります。「あな

たは、自分の力で正しい人になれますか。自分で自分を変えられますか。」と聞きます。すると「出来ません」と答えます。自分で自分を変えられるならば、前科 7 犯、8 犯なんかになるはずがありません。前科は一犯で終わるはずです。しかし、終わらない。自分の罪を自分でコントロールすることが出来ないからです。それが罪人である人間の「罪の悲惨さ」です。それで私はこう言います。「そうですね。自分では変えられないですね。自分では変わることが出来ないですね。だから、何度も刑務所に来てしまったのですね。ですから、神様に変えていただきましょう。神様はあなたを変えることが出来ますし、あなたを新しく造りかえることがおできになります。これから、神様について学び、お祈りする人になりましょう。あなたは必ず変われます。」そのように申しまして、使徒信条に従って聖書の学びを始めます。そして、主の祈りと使徒信条を印刷したものを渡し、「毎日これを唱えなさい。朝も昼も夜も唱えなさい。そのためには、覚えてしまうことです。次の時までに覚えておいてくださいね。」と言って渡します。次に会うと時までに、これを覚えている人は本気で神様に変えていただこうとしている人です。しかし、何回聖書の学びをしても全く覚えていない人もいます。残念なことです。それでも、天地を造られたただ独りの神様のこと、イエス様が十字架にかかり三日目に復活されたこと。聖霊なる神様が、私共のすべてを導いてくださっていることを話します。父・子・聖霊なる神様を知らなければ、この方を信じ、この方に愛されていることを知り、この方に従って生きていこうとする新しい人にはなれないからです。勿論、それをしてくださるのは神様ご自身です。前科 8 犯の人も、彼らを管理している刑務官も、塀の外の普通の人も、神様の前には何の区別もありません。等しく滅びに至るしかない罪人なのです。

6．変えられていくわたし①主の祈り

受刑者の方と聖書を学び始める時、主の祈りと使徒信条をプリントしたものを渡すと申しました。その際に、主の祈りや使徒信条の説明・解説はしません。覚える前に説明しても、その時は分かったような顔をしても、言葉が右から左に抜けていくだけだからです。「主の祈り」を覚えた人には、「主の祈り」の説明をします。私は「主の祈り」というものは、私共に祈りを教えてくれるだけではなくて、「主の祈り」を祈るにふさわしい新しい人を私共の中に形作っていく力があると考えています。例えば主の祈りを祈るたびごとに「天にましますわれらの父よ」と神様に呼びかけるわけですけれど、その人は今まで神様なんて関係ない、自分の損得だけ、自分の欲しいものを手に入れることだけを考えてきた人です。その人が神様に向かって「父よ」と呼ぶ。毎日、何度も呼ぶ。そのようにしていく中で、神様に向かって「父よ」と呼ぶ者、つまり「神の子」がその人の中で立ち上がっていく。今日は、主の祈りについての説教ではありませんので、これ以上は申しませんけれど、主の祈りを祈っていく中で、この祈りにふさわしい新しい私が神様によって形作られていく。勿論、それと共に聖書を読むことは欠くことが出来ません。聖書を読んで、祈って行く中で、祈ることが変わっていきますし、主の祈りに導かれる「新しい私」「神の子としての私」がその人の中に立ち上がってくる。私はそう信じています。何故なら、良くわからない

聖書を読み、意味の分からない主の祈りを毎日唱えていくということは、どうして可能なのか。そんなことは続かないのが普通でしょう。しかし、毎日それを続ける人がいる。どうして可能なのか。それは、その人が聖霊なる神様の導きの中にあるからです。それ以外に考えようがありません。そうして「自分は中々良い人間だ」と思っていた「古い私」が砕かれて、「新しい私」が立ち上がっていく。そして、「神様のみ前に立つ」ということを知る者になっていく。自分が悪いことだ、二度としないと思っていても、ついしてしまう自分を心の底から「造り変えてください」と祈る者になっていく。それは、刑務所の中でだけ起きることではありません。同じことが、パウロの中で、世々の聖徒たちの中で、そして私共の中で起きたこと、起き続けていることです。これは、一度起きれば良いという出来事ではありません。起き続ける。そして、私共は「新しいわたし」になり続けていきます。使徒パウロが「わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」(二コリ 4:16)と告げている通りです。

7．まとめ

私共はこの唯一の慰めを受け取り、この慰めの中を生きていくために、「第一に、どれほどわたしの罪と悲惨が大きいか、第二に、どうすればあらゆる罪と悲惨から救われるか、第三に、どのようにこの救いに対して神に感謝すべきか」を知らなければなりません。しかし、この「知る」ということは「本当に知る」ということです。これは頭で理解するということとは、少し違います。神様のみ前に立って、自らの罪を告白し、赦しを求め、イエス様の十字架の尊い血潮によって一切の罪を赦された者として、新しい私として、神様の子・神様の僕として生きる者になるということです。父・子・聖霊なる神様との親しい交わりの中に生きる者とされるということです。わたしの全存在が変えられ、感謝と祈りと賛美をもって御国に向かって生きる者とされるということです。私共が主の日のたびごと捧げている礼拝は、この新しくされた私が、御国の先取りとして与えられている恵みです。これからも、主の日の度ごとにここに集い、御国への歩みを確かなものとされて、ここからそれぞれの所に遣わされてまいりたいと願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう全能の父なる神様。

今朝もあなた様は私共を、この礼拝の場へと伴ってくださり、み言葉を与えてくださいました。感謝します。私共は目の前の出来事に心も時間も奪われ、自らが何者であるか、どこに向かっていかされている者であるか、すぐに忘れてしまうものです。そのような者でありますから、どうか、主の日のたびごとにみ言葉を与えられ、しっかりとただ一つの慰めの中を歩んでまいりとうございます。どうか、私共に聖霊を与え、私共の歩みを支え、導いてください。私共の唇に、あなた様への感謝と祈りと賛美を満たしていってください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン